

## 審査論文の要旨

本論文は英国の作家 Kazuo Ishiguro (1954-)の現在までに発表された 6 編の長編小説を、「現実の構成」という観点から分析し、作家がこれまで目指してきた目標をどの程度達成できたかを考察しようとするものである。対象となる作品は、*A Pale View of Hills* (1982)、*An Artist of the Floating World* (1986)、*The Remains of the Day* (1989)、*The Unconsoled* (1995)、*When We Were Orphans* (2000)、*Never Let Me Go* (2005)である。

序論では、これまでの研究・批評史を丹念に辿り、イシグロと彼の作品が受けてきた様々な誤解を明らかにし、イシグロがこれまで目指してきたのは、作品を「メタファーの領域へと飛翔」させること、すなわち特定の地域や時代を超越した普遍性のあるメッセージを持つ作品を書こうとしてきたこと、そして、その意味において「国際的作家」になろうとしたことであると論じる。また、イシグロの発展過程を分析するために、イシグロがこれまでの作品で一貫して使用してきた「一人称の語り」に注目するが、「一人称の語り」をこれまで定義が曖昧なままで使われてきた文学専門用語の「信用できない語り」としてではなく、「現実を構成する語り」と捉え直すことが有効であり、これにより長編第 1 作の *A Pale View of Hills* から、作者自身が「信用できない語り」ではないと話している最新作の *Never Let Me Go* ままで一つの線でつないで論じることができると主張する。

以下第 1 章から第 6 章までの各章において、「現実の構成」をキーワードに、6 編の長編小説それぞれの分析が行われる。

第 1 章「*A Pale View of Hills* : 他人の姿を借りて自分を語る—罪の意識から身を守るための現実構成—」では、偽りの記憶によって「現実を構成する」語り手が分析される。*A Pale View of Hills* は、娘を自殺に追いやったのは自分ではないかという罪の意識を抱えながら、それを認めることができない女性が、娘が生まれる前の夏を回想する物語であり、回想の中の一人の女性は語り手の分身であるとする。つまり、直接語れない罪の意識を語り手は別の女性の姿を借りて告白する。このようにするのは、事実を直視すると罪悪感に押しつぶされてしまうからであり、語り手には嘘をついているという意識はない。偽りの記憶は過去の現実として認識され、本当にあったことを思い出すことはもはや不可能になっている。*A Pale View of Hills* は忘れたいが忘れられない過去の現実を人はどのように構成して語るかを描いている作品であると論じる。

第 2 章「*An Artist of the Floating World* : 自己像に合わせて記憶を作る—自尊心を守るための現実構成—」で分析する *An Artist of the Floating World* には前作と同じく偽りの記憶を利用する語り手が登場する。戦時体制に協力的であった主人公の画家は終戦後戦争責任を追究されはしまいかとおびえている。画家は過去の過ちは信念を貫いた結果であり、また、潔く謝罪できる自分は尊厳を保つことができたと信じている。しかし、彼が戦争責任を追究されるほど社会に影響力があつた人物かどうかは疑わしいことが、テキストの分析を通じて明らかにされる。語り手は社会に大きな影響を与えた人物という自己像を抱き、これに合うように過去のエピソードを作り上げているのである。こうした分析に基づき、*An Artist of the Floating World* は過去のエピソードの集積が自己像を作るのではなく、自己像が先にあってそれに合わせて記憶を作る、すなわち「現実を構成する」という新しい人間観に基づいた作品になっていると論じる。

第 3 章「*The Remains of the Day* : 偉大な執事の神話で過去を粉飾する—不作為を言い逃れるための現実構成—」で取り上げる *The Remains of the Day* では、自分の人生が偉大な執事への軌跡を辿ったと主張しようとする主人公の執事が、実は、唯々諾々と主人の指示に従い、私生活においても自ら大きな決断をすることができなかつただけだということを、テキストの行間から読み取ることによって分析する。そして、主人公は感情抑制と自己犠牲を条件とする「偉大な執事」像を作り上げ、不作為を粉飾するために過去の「現実を構成」しようとする語り手であると論じる。

また、この章ではここまで論じてきた「前期三部作」の「語り」の違いの分析も行われて

おり、この三作は、一様に記憶を利用した自己欺瞞の語りと見做されることが多いが、前二作では、偽りの記憶と1人称の語りを組み合わせたことで、小説世界の事実が確定しない部分が多いという特徴を持つが、*The Remains of the Day*では、語り手は、過去のエピソードをほぼ正確に報告しながら、その解釈が不自然な語り手であると指摘する。

第4章「*The Unconsoled*: 現実の構成が不可能な小説、あるいは現実の構成を徹頭徹尾読者にゆだねる小説」では、次々と不条理なことが起こり小説世界の事実がほとんど分からない *The Unconsoled* を分析する。イシグロは、語り手が外国の町で出会った人々に自分の記憶や不安を重ねているのだと説明しており、多くの先行研究もこの解釈を取っているが、このように解釈しても、事実と語り手の意識の構成したものを区別することはできないと主張する。そして、*The Unconsoled* に意味を見出すためには、それぞれの読者が事実を裁定する、すなわち、与えられた材料を取捨選択して「現実を構成する」ことが先ず求められる作品であると論じる。

第5章「*When We Were Orphans*: 探偵小説を生きる—崩壊した楽園の回復を信じるための現実構成—」で取り上げる *When We Were Orphans* では、悪の根源を駆逐すれば戦争を含むありとあらゆる悪も根絶することができると信じている探偵が主人公の語り手である。論者はテキストの分析を通じて、語り手が探偵小説（特にシャーロック・ホームズ物）のような世界観を持ち、それに従って行動するのは、主人公が子供の頃に両親が突然失踪したことによる心的外傷が原因になっていること、すなわち、「崩壊した楽園」の回復を信じるために、探偵小説というフィルターをかけて「現実構成」をしていることを明らかにしようとする。また、この作品の前半が前期三部作、後半が *The Unconsoled* のような不条理小説となっているが、それは単純に以前の作品を足し合わせたのではなく、語り手の心理の変化の反映であると論じる。

第6章「*Never Let Me Go*: 集団で現実を構成する—普通に生きるために—」で検討される *Never Let Me Go* の語り手と仲間たちはクローン人間である。臓器提供を義務付けられ若い死を定められた子供たちは、彼らを守る大人たちから本当のことを知らされていない。子供たちも隠されたものがあるのを感じながら、真実を知ることがためらう。論者は、*Never Let Me Go* は1人称の語りという形式は引き継ぎながら、「現実構成」の点では他の5作品と一線を画していると主張する。まず、*When We Were Orphans* までは語り手個人が抱える問題が「現実構成」の動機であったのに対して、*Never Let Me Go* の「現実構成」は集団で行われる点を指摘する。また、*Never Let Me Go* での「現実構成」の方法は、Aという現実が与えられた中でBという別の現実を作り上げるという積極的なものではなく、Aという現実の一部から目をそむけ、A'という受け入れやすい形に変えるという消極的な構成が主であるとし、このような「現実構成」は目立つものではなく、欺瞞や空想というほどの大げさなものでもないが、日常の中で我々がしばしば経験することであると主張する。また、登場人物はクローンであるが、特別な能力やこだわり、心理的傷を持たない彼らはいつかは死ぬ運命にある普通の人々のメタファーであり、何らかの心理的問題を抱えておらずとも、人は現実を構成しながら生きているということを *Never Let Me Go* は読者に気付かせると論じる。

「結論」では、以上のような各作品の分析を踏まえて、イシグロは、普遍性のあるメッセージを読者に届けるという目標を *The Remains of the Day* である程度達成できたが、*Never Let Me Go* によってさらにその目標に近づくことができた結論づける。